

17年の時を経て、 父の気持ちに寄り添う。

松江教会 金築克征さん

金築さんは長年恨んできた父に自分の家族と共に再会することになった。昔、父は昼から酒を浴びるように飲み、あげくアルコール依存症になり入退院を繰り返す有り様。仕事にも就かず、生活は困窮を極め、金築さんが高校2年のときに両親は離婚した。以来17年、縁を絶っていた。再会は、尊敬する人からの助言がきっかけだった。親を敬い、大切に。仏教徒である金築さんはそのことを頭では理解できていても心では受け入れられなかった。会うのか会わないのか逡巡したが、息子からの「おじちゃんに会いたい」という言葉に背中を押され父のもとへ向かった。再会の時、無言のまま歩み寄り強く抱き合った。「すまなかった…。」嗚咽のなかで絞り出すような細い父の声に、堰を切ったように涙が溢れた。「父がいなければ、自分の存在も息子の存在もない」と心から感謝の念が湧いてきたという。金築さんは、「これまで学んできた親孝行を実践するのはいまだであり、これからです。父を支えていくことが私の修行だと思えます」と語る。



踏みとどまる

怒りや欲、自己中心の考えに流されそうになったとき、どうすれば踏みとどまることができるでしょうか。私は、とりあえず「ひと呼吸おく」ことをおすすめします。一度、深呼吸をするだけで少し心が鎮まります。できれば、ひと晩おいて冷静に考えるのも大切なことでしょう。

また、信仰をもつ人であれば、心に貪・痴の黒い雲がわきかけたら、「仏さまはどうお考えになるだろう」「どうなさるだろう」と思いをめぐらせば、冷静さをとり戻せると思います。なかには、神仏のような姿の見えない存在ではなく、「親父ならどうするだろう」「母なら…」と、直接縁のあった身近なお手本を思い浮かべ、怒りや欲やわがままな気持ちを落ち着かせる人もいることでしょう。

「八正道」の二つめにあげられる「正思」は、「貪・痴・癡を離れ、仏さまのような大きな心で考える」ということです。それを生活に即していえば、感情や衝動に駆られそうになったら、まず「ひと呼吸」入れて踏みとどまる、というところに、実践の入り口があるのではないのでしょうか。